

令和4年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

学校の現状と課題を踏まえて、重点課題として3項目を取り上げ、目標達成に向けて、当該分掌部が中心となり全教職員の共通理解を図りながら取り組んだ。評価は以下のとおりである。

(1) 主体的に運動できる児童生徒の育成

7月と11月に「運動チャレンジ週間」を設け、児童生徒が一人一人に応じた目標を立て、ランニングやダンスなどの運動に取り組んだ。運動動画を取り入れたり、頑張り表に好きなシールを貼ったりなど指導内容や支援方法を工夫したことで、児童生徒は楽しみながら体を動かすことができた。また、全校共通の目標・評価カードに毎日の運動の結果を記録し、「運動チャレンジ週間」後に廊下等に掲示したことで、児童生徒は、友だちの頑張りを見て新しい運動に取り組んだり、周囲の教員に褒められ運動週間後も意欲的に運動に取り組んだりすることができた。

(2) 児童生徒の防災意識向上のための指導の充実

通常の授業の中で、防災意識を高めたり避難行動を身に付けたりする学習を行った。小学部では「おはしも（おさない、はしらない、しゃべらない、もどらない）」を意識した一列歩行、中学部では校外学習の地震の模擬体験等を生かした避難の仕方、高等部では校内地図を使った避難場所に応じた避難経路の確認など、児童生徒は、火災や地震を想定した学習に真剣に取り組むことができた。避難経路の確認では、教室の他、音楽室、体育館などから実際に歩いてグラウンドへ避難したり、作業学習の時間に担任以外の教員と避難したりし、いつでも誰とでも避難できることを目指して取り組むことができた。

(3) 学級担任等との連携に基づいた生活支援の充実

寄宿舎指導員は担当舎生の学年ケース会議に参加し、個別の指導計画の目標や支援方法等について共通理解を図るとともに、それを踏まえた舎生の生活支援目標を設定した。指導員は、授業見学等を通して舎生への接し方や支援ツールの活用などについて担任等と情報交換し、寄宿舎での効果的な支援に生かすことができた。その結果、コミュニケーション、入浴、洗濯、余暇の過ごし方など、個々の舎生の生活支援目標について成果が見られた。また、寄宿舎での洗顔の取組を家庭でも同様に行ったり、舎生同士で洗濯の仕方を教え合ったりするなどの姿が見られるようになってきた。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) 児童生徒が主体的な運動を継続するための支援の工夫を引き続き行うとともにそのきっかけとなる「運動チャレンジ週間」のような取組を検討する。
- (2) 出火場所に応じた避難訓練の実施や災害時の安全な児童生徒の保護者への引き渡しについて検討する。
- (3) 児童生徒の生活習慣の向上や主体的に取り組む力を身に付けるために、学級担任や保護者との連携を深めるとともに、指導員間の効率的な引継ぎ等について検討する。

8 学校アクションプラン

令和4年度 富山県立しらとり支援学校アクションプラン - 1 -					
重点項目	学習活動				
重点課題	主体的に運動できる児童生徒の育成				
現 状	<p>本校では、健康な体と体力づくりのために積極的に運動を取り入れている。小学部では、週2時間の「体育」の他に、1時限目の「日常生活の指導」で、多くの学級が毎日10～15分程度運動に取り組んでいる。中学部と高等部は、週2時間の「保健体育」の他に、月曜日から木曜日の毎日1時限目に「保健体育」を0.5時限ずつ時間設定し、15分程度運動に取り組んでいる。児童生徒の実態や興味に合わせてランニングやダンス、踏み台昇降などを行っており、目標を決めて意欲的に取り組んでいる児童生徒がいる一方で、ランニングなど苦手な運動には消極的な児童生徒も見られる。</p> <p>児童生徒の多くは風船バレーなどの簡単な運動ゲームやダンスなどに意欲的に取り組む様子が見られることから、教師が活動内容や支援方法を工夫することで、より多くの児童生徒が楽しみながら進んで体を動かすことができるようになることを考える。また、「運動チャレンジ週間」を設け、個々の実態に応じた目標を決めて全校（各学部ごと）で取り組むようにする。目標を達成したり楽しんで運動したりしている児童生徒を紹介することで、新しい運動に取り組んだり、目標を今までより高く設定したりするなど進んで運動する習慣を身に付け、主体的に運動できる児童生徒の育成を目指していきたい。</p>				
達成目標	<table border="1"> <tr> <td>児童生徒が主体的に運動に取り組むための支援の工夫や改善をした教員の割合</td> <td>「運動チャレンジ週間」の個人目標を達成できた児童生徒の割合</td> </tr> <tr> <td>100%</td> <td>1回目（7月） 80% 2回目（11月）100%</td> </tr> </table>	児童生徒が主体的に運動に取り組むための支援の工夫や改善をした教員の割合	「運動チャレンジ週間」の個人目標を達成できた児童生徒の割合	100%	1回目（7月） 80% 2回目（11月）100%
児童生徒が主体的に運動に取り組むための支援の工夫や改善をした教員の割合	「運動チャレンジ週間」の個人目標を達成できた児童生徒の割合				
100%	1回目（7月） 80% 2回目（11月）100%				
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 運動をする時間を確保し、児童生徒が目標をもって楽しんで取り組めるように、活動内容や支援方法を工夫する。 1学期と2学期に各1回、1週間の「運動チャレンジ週間」を設け、個人目標を立てて運動に取り組む。目標は、「新しい運動に取り組む」「自分で選んだ運動をする」「今までよりも回数を増やす」など、児童生徒が意欲的に運動に取り組めるような目標にする。 目標や達成状況は、学部ごとの統一の様式に記入して掲示し広く紹介する。 				
達成度	<table border="1"> <tr> <td>児童生徒が主体的に運動に取り組むための支援の工夫や改善をした教員の割合</td> <td>「運動チャレンジ週間」の個人目標を達成できた児童生徒の割合</td> </tr> <tr> <td>96%</td> <td>1回目（7月） 98% 2回目（11月）100%</td> </tr> </table>	児童生徒が主体的に運動に取り組むための支援の工夫や改善をした教員の割合	「運動チャレンジ週間」の個人目標を達成できた児童生徒の割合	96%	1回目（7月） 98% 2回目（11月）100%
児童生徒が主体的に運動に取り組むための支援の工夫や改善をした教員の割合	「運動チャレンジ週間」の個人目標を達成できた児童生徒の割合				
96%	1回目（7月） 98% 2回目（11月）100%				
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 7月と11月（高等部は10月）に、「運動チャレンジ週間」を各1週間ずつ実施した。1時限目の「日常生活の指導」「保健体育」などの時間に15分程度の運動の時間を確保し、児童生徒一人一人に合わせた目標を立てて運動に取り組んだ。目標・評価カードを活用し、「運動チャレンジ週間」後には廊下等に掲示して、他の児童生徒の取組を見られるようにした。 教員は、児童生徒が主体的に運動に取り組むための、支援の工夫や改善を行った。 				
評価	<p>A</p> <ul style="list-style-type: none"> 「運動チャレンジ週間」の個人目標を達成できた児童生徒の割合については、1回目は5人ほどの児童生徒が「場所に行ったけれど取り組めなかった」ということで98%であった。1回目の取組を踏まえて、教員が支援や活動内容を工夫したり変えたりした結果、2回目の「運動チャレンジ週間」で個人目標を達成できた児童生徒は100%となった。 「運動チャレンジ週間」の取組についての教員アンケートでは、「新しい運動にチャレンジする機会になった」「他の生徒の目標・評価カードを見て『自分もやってみよう』の声が聞かれた」「毎朝の運動習慣につながったと同時に余暇活動も広がった」など、取組に効果があったとする意見が多くあった。 				
学校評議員の意見	<ul style="list-style-type: none"> 期間を決め、児童生徒の実態に合わせて目標や支援を設定しての取組は良かった。目標達成の評価表を学級以外の教員にも見てもらい、褒められることはとても良い。 事業所にも、運動が苦手な肥満傾向の利用者がいるので、興味深い取組であった。小さいころからの生活習慣が大事である。 				
次年度に向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が主体的な運動を継続するための支援の工夫を引き続き行うとともに、そのきっかけとなる「運動チャレンジ週間」のような取組を検討する。 				

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった)

重点項目	学校生活	
重点課題	児童生徒の防災意識向上のための指導の充実	
現 状	<p>本校では、例年防災に関する訓練として、火災や地震に係る避難訓練を年3回実施している。しかし、昨今の新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から密になる状況を避けるため避難訓練を簡略化したり、大雪のため訓練が中止になったりするなど、実際の避難行動を伴った訓練が十分できない状態が続いているため、児童生徒の防災意識の低下が懸念される。そこで、実際の災害場面でも安全に避難できるように、コロナ禍の中でも実施できる防災学習を考えていくことが課題となっている。今後も避難訓練が十分できない状況が起こりうることを踏まえ、通常の学習活動の中で児童生徒の防災意識を高めることができる取組が必要である。</p>	
達成目標	通常の授業において災害時の避難行動につながる学習活動の一つ以上導入した学級の割合	児童生徒による校内の避難経路の確認を年3回以上行った学級の割合
	80%以上	100%
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的に防災意識を高めたり、避難行動を身に付けたりするために、児童生徒の実態に応じた防災につながる学習活動を各学年等で検討し、通常の授業の中で実践する。 例：「机もぐりゲーム」（遊びの指導）：「地震だ」の言葉を聞いて机の下に入る。 「おはしも整列」（体育）：運動場まで「おさない、はしらない、しゃべらない、もどらない」を守りながら移動し整列する。 ・各学部の防災学習の実践例をグループウェア等で紹介する。 ・避難経路の学習として、教室等から運動場や体育館などの避難場所までの経路を児童生徒自身が考えながら移動する学習などを取り入れる。 ・避難訓練の事前学習などにおいて、災害について分かりやすくまとめたDVD、インターネット上のコンテンツ等を視聴し、災害時の様子や避難行動について学習する。 	
達成度	通常の授業において災害時の避難行動につながる学習活動の一つ以上導入した学級の割合	児童生徒による校内の避難経路の確認を年3回以上行った学級の割合
	100%	100%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部では、生活単元学習や体育の時間に「おはしも」を意識して並んで歩く学習などを取り入れた。中学部では、校外学習で訪問した四季防災館で学習したことを生かして、より良い避難の仕方を総合的な学習の時間に学習した。高等部では、体育で「おはしも」を守って移動や整列する学習をしたり、国語で避難方法を説明する学習を取り入れたり、数学で避難場所まで行くルートが何通りあるか考えるなどの学習を取り入れたりした。 ・年度初めや避難訓練が実施される前の週などに、授業でグラウンドや体育館に移動するルートが災害時の避難経路になることを確認しながら移動した。 	
評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・通常の授業において災害時の避難行動につながる学習活動の一つ以上導入した学級については、56学級全ての学級において導入した。 ・避難経路の確認も、56学級全ての学級で3回以上行った。
学校評議員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・出火場所によって避難経路は変わるため、いくつかのパターンで練習することが望まれる。 ・実際に災害が起き、児童生徒の保護者への引き渡しが行われるときに、近隣の道路が渋滞になることが予想されるため、地域と連携し対応する必要がある。 	
次年度に向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・近年の避難訓練では、プレイルームからの出火による避難訓練が多かったが、今後は調理室など他の出火場所による避難訓練も行っていく。 ・引き渡し訓練を行うことを検討するとともに、児童生徒の引き渡しが行われた際の保護者の車や周辺道路の安全対策について地域と連携しながら対応できるようにする。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった)

重点項目	その他（学校と寄宿舎の連携）	
重点課題	学級担任等との連携に基づいた生活支援の充実	
現 状	<p>小学部5年生から高等部3年生までの児童生徒が入舎しているが、実態は様々であり、生活面や行動面での一人一人に応じた支援が必要である。寄宿舎では、一人一人の基本的な生活習慣の定着に重点をおいて支援するとともに、集団生活を送る上で必要なルールやマナーを身に付けることも大切にしている。生活面での支援については、個別に支援目標を設定し、ケース会議、懇談会、日々の引継ぎ等で学級担任や保護者と情報交換しながら支援を行っている。昨年度より、指導員が学校の授業を見学し、寄宿舎での生活支援の参考としてきた。今年度は、さらに学級担任や保護者との連携を深め、環境設定も含めた具体的な支援方法について情報交換し、児童生徒の生活支援の充実を図り、一人一人の実態に応じて日常生活や社会生活の自立へと繋げていきたい。</p>	
達成目標	夏季休業中の学年のケース会議へ参加した指導員の割合	学級担任等との連携により生活面での支援について1つ以上成果がみられた児童・生徒の割合
	100%	90%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・担任との懇談会（年3回）学年のケース会議への参加（年2回）各学部の授業見学（学期に1回～2回）等を通して、担当児童生徒について担任と情報交換し、生活面における支援方法について共通理解を図る。 ・学校の個別の指導計画の目標を踏まえて、寄宿舎の個々の生活支援目標を設定する。また、学年のケース会議では、それらの目標について、学校や寄宿舎での支援方法や達成状況について情報交換する。 ・生活面の支援について指導員間で共通理解を図り、日誌等に詳細に記載するなど児童生徒の状況や支援について丁寧な引継ぎを行う。 ・学級で活用している支援ツール等を寄宿舎での支援においても活用する。 ・担任や保護者に寄宿舎での生活の様子を映像で見てもらい、支援目標や支援内容について共通理解を図る。 ・舎内研修において個々の生活支援目標と支援状況について報告し、指導員全員で共通理解を図ったり、支援方法の見直しを行ったりする。 	
達成度	夏季休業中の学年のケース会議へ参加した指導員の割合	学級担任等との連携により生活面での支援について1つ以上成果がみられた児童・生徒の割合
	100%	100%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・学年のケース会議を踏まえて、コミュニケーション、入浴、洗濯、余暇の過ごし方などの生活支援目標を設定し、支援方法や手立てについて学級担任と共通理解を図りながら支援を行った。 ・授業見学では、舎生との接し方や支援ツールの活用の仕方について直に見ることができ、指導員間での共通理解や効果的な支援に生かすことができた。 ・一週間の予定表や洗濯、掃除などの手順表やがんばり表、活動の振り返り表などの支援ツールを、学級担任、家庭、三者で共有し活用した。 ・指導員同士の引継簿に目標欄を作成し一貫した支援ができるようにした。 ・iPad で支援や舎生の活動の様子を保護者に見てもらったことにより、支援方法について共通理解を図ることができた。 	
評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・2,3学期生17名の各学年のケース会議に、各担当指導員全員が参加した。 ・1学期に目標達成が難しかった舎生も、2学期にツールの工夫や、スモールステップでの支援を行ったことにより目標を達成することができた。 ・1学期生13人と2学期生16人の全員に生活支援目標について成果がみられた。
学校評議員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人に応じて、スモールステップで目標を設定し支援をしていることは、良いと思う。 ・生活面での小さな支援の積み重ねが自立には大切なことである。 	
次年度に向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・寄宿舎生の生活習慣の向上や主体的に取り組む力を効果的に身に付けるために、学級担任や保護者との連携を深めるとともに、指導員間の効率的な引継ぎや共通理解について検討する。 	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった）